

学校における多文化共生の実現に向けた試み

—学生の小学校クラブ活動への参加を通して—

林 朝子・服部 明子

Aiming at the Achievement of Multiculturalism at School: Through Students' Participation in Club Activity of Elementary School

Asako HAYASHI and Akiko HATTORI

要 旨

国際化が進む学校現場において、日本人児童生徒と外国人児童生徒が共に学ぶ空間作りは急務の課題である。本稿では、教員免許取得予定の学生が、多文化共生をテーマにした小学校「世界を結ぼう」クラブでの体験を通し、学校における多文化共生へどのような意識を持つに至ったかを、学生のレポート内容を基に明らかにした。最終的に、学校という空間に求められる多文化共生への意識化ができ、今後も多文化共生について考えていきたいという姿勢につながった。

1. はじめに—実践の目的と背景—

国際化が進むにつれ、学校現場においても様々な文化・習慣や言語を持つ子どもたちが共に学ぶことが恒常化されつつあり、学校の多文化化が進んでいる。このような状況の中、学校の多文化共生¹⁾のあり方が、子どもたちへの教育内容に与える影響が大きいことは想像に難くない。文部科学省からも、外国人児童生徒の教育を充実するための方策等が打ち出されている。平成 20 年「外国人児童生徒教育の充実方策 (報告)」の「外国人児童生徒の受入の意義」においては、外国人児童生徒と日本人児童生徒が共に学ぶことにより、「異なる文化を持つ人々と共に生きていこうとする態度」が育まれることが述べられている²⁾。しかし、実際の多くの学校現場では、教師側が多文化共生を踏まえないまま、学級作り・学校作りが行われており、外国人児童生徒と日本人児童生徒が共に学ぶための基盤となる環境が作られていないのが現状である³⁾。学級・学校という環境において、外国人児童と「日本人児童との良好な交遊関係 (= 教室内ネットワーク) が形成されていけば、日本語の習得に限らず、外国人児童の情緒の安定や学力の向上にも結びついていく」(矢崎 2008)⁴⁾ はずであり、子どもたちの間で「良好な交遊関係」を培うためには、教員が多文化共生を理解し、常に意識をすることが必要であろう。

例えば、三重県の場合、公立学校に在籍する日本語指導が必要な外国人児童生徒 (学校数) は、小学校 1,213 名 (139 校)、中学校 464 名 (60 校)、高校 222 名 (19 校)、特別支援学校 21 名 (6 校) となっており (平成 26 年 5 月 1 日現在)⁵⁾⁶⁾、教員となった場合に外国人児童生徒と関わる可能性は大きく、教員養成の段階から多文化共生を意識しておくことは当然必要とされるものであろう。

しかし、実際に教員を目指す学生の様子を見てみると、外国人児童生徒の現状や課題、多文化共生に関する知識がなく、また、意識も非常に低いことがうかがえる。このような学生の現状を受け、学生が学校における多文化共生を考え、意識するための試みとして、「人間発達実地研究 V」の授業において、多文化共生をテーマにしている小学校クラブ活動参加への取り組みを行った。本稿では、この取り組みを通して多文化共

生やそのための活動に関する学生の意識がどのように変化し、最終的に学校における多文化共生を如何に捉えたのかを明らかにしていく。なお、学生の意識は、ショーン (2007)⁷⁾ の省察的実践の考えに基づき、学生のレポートでの言葉による表現内容から考察していくこととする。

2. 取り組み概要

本取り組みは、教育学部教員 3 名（林朝子・服部明子・武頼）が担当した平成 26（2014）年度後期開講授業「人間発達実地研究Ⅴ」の中で行い、日本語教育コース学生と留学生、計 20 名が参加した。20 名の内訳は、日本人学生（1 年生）9 名、中国人留学生 6 名、ベトナム人留学生 2 名、タイ人留学生 1 名である。本稿では、小学校・中学校免許取得予定の日本人学生 9 名（以下、学生は A～K と記す）を対象に、学校における多文化共生についての意識の変容を見ていく。

2-1. I 小学校「世界を結ぼうクラブ」について

三重県津市の I 小学校には、常に数名程度の外国人児童が在籍しており、外国人児童生徒の教育や多文化共生のあり方について、長年にわたり取り組んでいる学校である。I 小学校の 4 年生以上を対象としたクラブ活動に「世界を結ぼうクラブ」が加わったのは、平成 20（2008）年度であり、現在まで継続されている⁸⁾。本年度は、参加児童は 4 年生 10 名（内、1 名は日系ブラジル人児童、1 名はオーストラリア人児童）で、小学校クラブ担当教員は 2 名であった。

クラブの目的は、1) 世界には様々な国や文化があることを知るきっかけを作ること、2) 母国の文化や習慣を知り、アイデンティティ確立の一助となること、3) わかったことや知ったことを学校の友達に発信することであり、最終的には、様々な文化を知り、認め合い、そして、友だち関係作りへとつなげていくことである。クラブには日本人児童・外国人児童が参加しており、クラブ活動で知ったこと・感じたことを友だちや家族に伝えている様子もみられ、多文化共生へつながる活動として位置付けられる実践である。

2-2. 取り組みの流れ

本取り組みの流れを表 1 に記す。

【表】クラブ活動とレポート課題の流れ

月日	内容	レポート課題
12/1	クラブ参加（於：小学校） 自己紹介ゲーム 世界のじゃんけん（日本・中国・ベトナム・タイ）・世界の挨拶（中国・ベトナム・タイ）	クラブ参加レポート
12/8	クラブ参加振り返り（於：大学）	クラブ参加振り返りレポート
1/26	クラブ企画実施Ⅰ（学生グループ②9 名担当）（於：小学校） 中国の小学生・李華さん的一天を通して中国を学ぼう	クラブ企画実施Ⅰレポート
2/16	クラブ企画実施Ⅱ（学生グループ②11 名担当）（於：小学校） いろいろな国について知ろう！ワールドバスケット	クラブ企画実施Ⅱレポート 最終レポート（学校の多文化共生について）

12/1 クラブ参加は、小学校の先生方がされる活動に学生も児童と共に参加し、12/8 クラブ参加振り返りは、学生のクラブ参加レポートを基に、気づきや疑問点を全員で共有した。1/26 クラブ企画実施Ⅰ・2/16 クラブ企画実施Ⅱは、学生が2グループに分かれ、それぞれが1度ずつ活動を企画し実施した。クラブ参加、クラブ参加振り返り、クラブ企画実施Ⅰ・Ⅱの後、それぞれの内容をまとめ、気づきや考えたことをレポートとしてまとめさせた。また、最終レポートとして、クラブ参加や活動の企画実施を通し、学校の多文化共生についての考えたことをまとめさせた。

クラブ参加や振り返り以外の授業においては、「外国人児童生徒と学校の現状と課題」「中国の文化や社会」「日本と中国、日本とベトナム、日本とタイについて文化比較発表」等を行い、学校における多文化共生を考え、小学校での多文化共生のための活動を企画するための基盤作りを行った。また、授業履修学生が日本人・中国人・ベトナム人・タイ人だったことで、毎回の授業そのものが多文化を感じる空間となっており、学生同士で文化や習慣の違いに驚きと戸惑いを実体験できたことも、多文化共生や活動について考える一助となった。

本稿では、レポート課題として挙げた5つのレポート内容を分析し考察を行っていくが、第3章では、クラブ参加レポート・クラブ参加振り返りレポート・クラブ企画実施Ⅰレポート・クラブ企画実施Ⅱレポートの4つのレポート内容を取り上げ、第4章では、最終レポートを通し、学生が考える学校における多文化共生について述べていく。

3. 学生コメントと考察（1）－クラブ参加・クラブ参加振り返り・クラブ企画実施ⅠⅡのレポート－

学生が提出した4つのレポート内容を分析し、考察を加える。クラブ企画実施Ⅰとクラブ企画実施Ⅱでは、企画実施担当の学生グループと支援参加の学生グループに分かれたが、学生のレポートのコメント内容にはグループ間での差がないことから、今回は区別せずに扱うこととする。なお、学生のレポートからの引用部分（文字サイズが細かい部分）は原文のままであり、下線と（ ）内記述は筆者によるものである。

3-1. クラブ参加レポートの分析と考察

学生は初めて小学校クラブに参加し、子どもたちとも初対面である。学生の中にはほとんど小学生と交流したことがなく、児童との接し方や声のかけ方等に不安を感じている者もいたが、活動内容が学生2名と児童1名のグループに分かれての自己紹介と世界のじゃんけんゲームであったため、学生も児童に自然と話しかけることができ、非常に打ち解けた様子が見られた。

クラブ参加レポートには、全ての学生のコメントに、「子どもたちとの交流が楽しかった」という内容が見られ、児童に対して苦手意識を持っていた学生も自分なりに工夫をし、交流ができていたようである。

では、多文化共生に関わるコメントをみていきたい。最初のレポートであるため、「学校における多文化共生とは何か」については具体的に書かれてはいなかったが、なぜこのようなクラブ活動が必要であるのか、どのように子どもに伝えるのか、等についてのコメントを通して、学校における多文化共生に意識が多少なりとも向けられていることがわかる。学生のコメントを、大きく【国際化への気づき】【子どもと多文化共生】【活動内容と教育方法】【外国人児童の様子】の4つの観点から、分析と考察を行う。

3-1-1. 【国際化への気づき】

- ・（子どもたちの中に日系ブラジル人児童がいることについて）授業などでよく、日本の小学校に通う外国人の子が増えていると学習するため、知識としては知っているものの、実際目のあたりにし、本当に増えているのだと改めて実感した。（E）
- ・同級生に日本人以外の児童がいて一緒に受けることが日常なのだと思うと、グローバル化を感じる。（H）
- ・自分の小学校の頃はそういった関わり（外国人児童との関わり）さへなかったもので、国際化が進んできているのだと考えました。

「国際化」「グローバル化」についての知識はあるが実感できていない学生も、学校の子どもたちの中にブラジルやオーストラリアにつながる児童が在籍していることを目の当たりにすることで、学校の国際化や多文化化に改めて気がつくことができたようである。

3-1-2. 【子どもと多文化共生】

- ・小学生の頃から異文化交流に関する活動を行うことで、大人になってからの異文化に対する思い込みや偏見を軽減することができ、異文化圏出身の人に対しても積極的に理解しようとし、国籍に関係なく接することができるようになるだろう。(G)
- ・多文化社会を生きるにあたって、まずは小学生がさまざまな国のことに興味を持つことが大切なのではないかと考える。(K)
- ・大きくなるまで多文化共生について考え、知る機会がないと、誤った偏見をマスメディアなどから抱き、いざ外国の人と関わるようになったときに良好なスタートをきりにくくなる可能性があるのではないかと。／国によって文化や考え方が違うことを知り、認め、尊敬することができるようになれば、普段の生活でも人間関係において柔軟な考えを持てるようになるのではないだろうか。(J)
- ・日本と違う意味などを知ると変だなと思うことが多いと思う。その変だなという感情からその国に興味を持ち、受け入れて、多文化共生につながると考える。(B)
- ・グローバル社会において、世界のことを学習というのはとても大切であり、今のうちから世界に対して目を向け興味を持つことは、将来的にすごく役に立つと思う。(C)

児童への多文化共生を目指した活動は、国籍や文化についての偏見や誤解を防ぎ、様々な文化を受け入れられる人材となることにつながり、国際化の進む社会においても有益なものであると考えられる。

3-1-3. 【活動内容と教育方法】

- ・どの文化も素晴らしいと思える教育をしていけば、子どもたちは多文化社会を上手に生きていけるようになるのかなと思った。(K)
- ・生徒のことを考え、楽しく外国のことを学んでほしいという先生たちの気持ちを感じられた。(D)
- ・外国の遊びなどを通して異文化というものに触れる機会を設けることで、日本だけでなく世界に目を向け、興味を持つことができるだろう。(G)
- ・ジャンケンという身近で、子どもにも理解しやすいものを題材にしていたので、とても取り組みやすかったです。(I)
- ・異文化交流は堅くとらえなくてもできるということを感じた。異文化の理解を完全にすることは難しいことではあるが、しかしそれは異文化交流が難しいということと完全に一致するものではないと考えている。(G)
- ・興味を持ってもらう引き出しを見つけることも大変だと思った。(H)
- ・クラブ活動などで外国のことを知るときに、担任の教師が専門的な知識を擁さない場合には、逆に偏見を抱くことになるかもしれない。(J)
- ・小学4年生の時点で都道府県をやっと少し覚えている状態なので、そこから外国について教えるのは難しいと思った。(H)
- ・どこまでの知識や考察を生徒に求めれば良いか。まだ初等教育の彼らに難しい内容を提示しても理解できないと思われるし、また容易すぎると興味関心が薄れてしまう恐れがある。(A)
- ・外国語や外国に対する知識はもちろん必要ではあるが、まずは日本国内のことに興味を持つべきなのではないかと私は思う。(C)
- ・ネイティブに会って直接話すことが最も児童に影響やその国へのイメージを与えることであると考えられるので、地域の外国人コミュニティと小学校の連携が必要である。(F)

初回のクラブ活動は、小学校の先生方が実施され、学生は児童と共に活動に参加する形となった。児童とも話しながら活動に参加することで、小学校での多文化共生につながる活動のあり方や小学生に適した活動内容について考えを深めることができています。年齢に合わせ、児童にとって身近な事柄を教材とすることで、児童の興味関心を引き出すことができると感じている。一方で、教師側が取り上げる内容の適否により、活動の意義に差が出てしまうことへの気付きも見られた。さらに、日本について知ることの重要性、地域との連携についても述べられていた。

3-1-4. 【外国人児童の様子】

- ・小学生の国籍に関係なく接している姿が印象的であった。(G)
- ・外国から来た子どもも数名いました。子どもたちと話していると彼らに対する特別な意識は感じられず、普通に接しているという印象を受けました。(I)
- ・一緒にグループになった子に「ブラジルのじゃんけん教えて」と私が問いかけたところ、恥ずかしそうに「あまり言いたくないなあ」と言われてしまった。その子はあまり自分がブラジル人であるという事を表に出したくないようであった。このことは、日本で多文化共生がうまく行われていないことがよく表れているのではないだろうか。外国人の子どもが自分は周りの日本の子たちとは違うと感じ、周りの日本人に合わせようとしているのだ。(E)

クラブには日系ブラジル人児童とオーストラリア人児童が参加しているが、子どもたちは日本人・外国人といったような関係ではなく、同じ4年生・友だちとしての関係が築けていると捉えている学生もいる。しかし、個人的に日系ブラジル人児童と話をした学生は、児童が「ブラジル人であるという事を表に出したくない」と感じ、その背景には、多文化共生が成り立っておらず、ブラジル人児童が日本に合わせようとしている様子を感じとっている。このように同じ児童に対して印象が異なるのは、子どもに表面的に接するだけでは見えてこない部分があるということを示唆しているであろう。

以上、クラブ参加レポートの分析と考察を行った。上記した以外に、数名の学生のレポートに「ハーフ」という表現が見られた。現在では「ダブル」という表現が広まっているが、学生全員がこの表現を知らず、「言葉」や「表現」への関心度の低さも感じ取られた。

3-2. クラブ参加振り返りレポートの分析と考察

3-1. で取り上げたクラブ参加レポートには、学生によって様々な気づきや疑問点があり、振り返りではそれらを全員で共有することを目的とした。他の学生の気づきを通して、新たな気づきが生まれ、活動の企画実施にも反映させることができると考えた。学生のレポートにも、振り返りを行うことで「自分の中の国際交流活動や多文化共生の考えが偏ったものだったのだと感じた」「(クラブ活動の意図をいまひとつ理解できないままであったが) 今回の話し合いを通して、自分のなかでの輪郭がはっきりしていった気がする」といったコメントが見られ、多文化共生やクラブの位置付けへの理解が深まり、疑問点が明らかになる様子が伺えた。さらに「活動において意識しておけばよいことや目的を全員で確認することができた」というコメントもあり、活動を企画実施するための前提となる多文化共生の活動のあり方についての共通認識が得られたようである。

クラブ参加振り返りでの学生同士が気づきや考えの交換を通してのクラブ参加振り返りレポートでは、【子どもと多文化共生】【活動内容と教育方法】についてはさらに具体的に内容が深められたコメントが見られ、また、【子どもへの対応】【活動の企画実施】をどのようにすれば多文化共生につながるのかという視点からのコメントへと繋がっていた。クラブ参加振り返りレポートでは、学生のコメントをこの4つの観点から、分析と考察を行っていく。

3-2-1. 【子どもと多文化共生】

- ・多文化共生という考えは、言葉を知らずとも自然とこの状態になっていることが理想的であると考えられる。であるから、小さいころから他の国の文化等を教えていくことで、違和感を感じないようになるのではないか。(F)
- ・(日系ブラジル人児童の様子を聞いて) 改めて日本が外国の人々を受け入れる体制があまりできていないと感じた。昔から日本では、日本人は日本人、外国人は外国人という大きな境界線が自然とある。(E)
- ・「自分とは違う」から特別な目で見るとはならず、それをひとつの個性としてとらえることができるような心を持つ。(J)

意識せずに自然と多文化共生がなされていることが望ましいとしながらも、現在の日本では多文化共生が十分に成り立っているとは言い難いことに気づいている。そのような日本において、子どもたちが早い段階から、様々な文化に触れることで「違う」のではなく「ひとつの個性」として捉えられるようになって考えている。

3-2-2. 【教育内容と教育方法】

- ・子どもたちに考えを押し付けるのではなく、いかに興味を持ってもらえるかが重要だ。そのためまずは、興味を持ってもらい、そこから自分たちで自主的に学びたいなと思えることが一番大切。(E)
- ・多文化共生や異文化交流という考え方が小学生の段階で正確に理解して活動することが本当にできるのかと考えさせられた。多文化共生・異文化交流に関する取り組みや活動を行うのは小学生であり、その前提を踏まえたうえで児童らの自主性を尊重しつつ活動を進める必要がある。(G)
- ・多文化共生について教授していくという姿勢ではなくこれをきっかけに多文化や世界について知ってもらおうという姿勢が大切なのだと考えなおした。子どもたちが授業の中で薄らと知った外国について、「もっと知りたい。他の国ではどうなのだろう。」などと自主的に学んでいくのが理想なのである。(H)
- ・多文化に触れることからまず始めて、それを子どもひとりひとりのスタート地点となるような授業をしていくことが大切だと分かった。(I)
- ・知識を押し付ける授業じゃなくて、これはどうなんだろう、知りたい、というような興味を引き出すことはとても大切だと思う。(K)
- ・子どもたちには多くのこと(様々な国のいい面、悪い面)を学んでほしいが、やはり、小学生にはまだ難しい問題であるだろう。変に教えてこの国は悪い国、と思い込んでしまうこともあると思うので難しい。(B)
- ・小学生はたくさん知識を吸収していく時期である。そんなときに先入観で物事を教えるようなことをしてはならないのだと思う。(C)
- ・クラスに外国の生徒がいるのなら、その子の国についてみんなで勉強したら、外国の生徒も自分に自信が持てるようになるかもしれないし、日本の生徒もその国について知ることができると思うし受け入れていけるかもしれない。子どもたちなりに考えることができるだろう。(B)
- ・子どもたちに国による文化の違いだけではなく、日本、日本人と外国、外国人の共通点も教えていくべきだ。(D)
- ・間違い探しのような活動は小学生の興味をひくことができると思うが、違うことばかり知ってしまうのは多文化共生の考えにそぐわないのではないか。(F)

【教育内容と教育方法】のコメントが最も多かった。児童にどのように多文化共生を伝えていけばいいのか、どのような点に配慮する必要があるのか、等、考えを深められていた。教師が一方向的に「教える」だけではなく、児童が「知ったこと」を更に「知りたい」と興味を持ち、自主的に学ぶ姿勢へとつなげることの重要性を述べている。また、教師として子どもたちに国や文化の一面だけを伝える危険性にも気づけており、多岐にわたる視点から子どもたちに伝える必要性を感じている。

3-2-3. 【外国人児童への対応】

- ・(日系ブラジル人児童の様子を聞いて)個性なのだからもっとさらけ出していいんだよ、ということその男の子には伝えてあげたい。(C)
- ・「外国人児童」であるということよりも、彼らも個々に異なる感じ方を持った人間である。そのため、外国人児童であるという理由で対応をひとつにまとめることは好ましくないのではないかと考えることができた。その児童の心情の尊重、学校や学級の雰囲気、該当児童の苦手な部分を補ってあげられる日本人児童の理解を求めることなど、児童に合わせた対応が必要であるのだと思った。(G)
- ・(日系ブラジル人児童の様子を聞いて)小学生だとほかの人と違うことは表したりしたくないのかなと考えた。外国の生徒はこれからは増えてくるだろうが、そのことに関しての措置を考えていきたいと思った。(B)
- ・(日本語理解が十分ではないオーストラリア人児童の話聞いて)日本語を上手く理解できていない状態で、他の勉強の科目ではどうなのだろうと心配になった。特別なサポートがされているのか、またどうサポートがなされるべきなのかという点はすごく大事な内容であると思った。しかしこれもまた特別な対応がされすぎてしまうと、児童自身は自分が他の児童と違うということを強く感じてしまう恐れがあるので、やはり難しい問題である。(H)

振り返りでの外国人児童2名に関わる発言から、児童たちへの対応について深く考えることができていた。「外国人児童」と一括りにすることはできず、それぞれの児童の様子や気持ちの在り方によって、対応に配慮する必要性を感じている。一方で、「特別な対応」をすることで、「違う」ことを児童自身が感じてしまう危うさについての気づきも見られた。

3-2-4. 【活動の企画実施】

- ・このような境界線（日本人は日本人、外国人は外国人）をなくすために、子どもたちが外国に対して興味が少しでも持てるような活動を行っていただけたらいいと感じた。(E)
- ・楽しんで活動できる体験型で、日常の身近なことから他の国に興味を持ってもらおう。(F)

振り返りでの意見交換を通して【子どもと多文化共生】【活動内容と教育方法】【外国人児童への対応】に関して、各学生の気づきが深められ、より具体的な考えを持てるようになった。それらを自分たちの活動の企画実施へとつなげようとする気持ちに繋がっている。

以上、クラブ参加振り返りレポートの内容を見てきた。様々な気づきや意見を知ることで、「多文化共生とは何か」「なぜ小学校で多文化共生を取り上げるのか」「どのような工夫をすれば子どもたちに伝わるのか」といった視点での考えを更に深めることができ、自分たちの活動の企画実施に活かそうとする意欲が感じられた。

3-3. クラブ企画実施Iレポートの分析と考察

学生グループIの9名（内、4名は中国人留学生）がクラブ活動の企画と実施を担当した。3-1. 3-2. で取り上げた2つのレポート内容も反映させながら、学生たち自身が活動を考え、「李華さんの一日を通して中国を学ぼう」というテーマとなった。グループIの活動企画書は以下である。

《グループIクラブ活動企画書》	
<ul style="list-style-type: none"> ・タイトル：「李華さんの一日を通して中国を学ぼう」 ・目的：中国についてクイズを通して楽しく知ってもらおう。 ・活動内容： 	
学習活動	留意点
1.机を動かしてもらおう(5分)	
2.グループ紹介(3分)	司会の人が行う
3.〇×クイズ「李華さんの一日」(35分) クイズについての説明(5分)	ある中国(北京)に住む3人家族の女の子の一日から中国について学んでいく。 クイズを始める前に、簡単なクイズをして、クイズの答え方について説明する。(実演) クイズなど、適宜画用紙を用いる。
① 「おはよう」朝ごはん(5分) 「お粥とチャーハンどちらのほうが中国でよく食べられるでしょうか。」	一緒に中国語で発音 正解はお粥。 中国の朝ごはんについて説明 「お粥」「饅頭」「豆乳」 一緒に中国語で発音
② 李さんが学校に行く(5分) 「日本では左側通行が一般的ですが、中国ではどちらを通行するでしょうか。」	正解は右側。 解説は行う。

<p>③ 李さんの授業を受ける(10分) 「中国の小学生は二時間の後に {ラジオ体操・太極拳} を行う」 中国では一緒に目の体操(=眼保体操)も行うので、その目の体操を一緒にする。</p>	<p>正解はラジオ体操。 (可能であればラジオ体操の音楽を流す。) 眼の体操を実演。(張さん)</p>
<p>④ 四時間目の社会(地理)の授業(5分)「中国は広い国だが、日本の {3倍・25倍} の面積である。」</p>	<p>正解は25倍。 画像を用意しわかりやすくする。</p>
<p>⑤ 家に帰ってアニメを見る(5分) 「どちらのキャラクターが中国にあるキャラクターでしょう。」 「おやすみなさい」</p>	<p>中国のキャラクター 喜羊羊 日本のキャラクター おでんくん を用意しておく。 一緒に発音</p>
<p>4.まとめ(2分) ※45分</p>	<p>「今日は一緒に学習してくれてありがとう」</p>

・用意するもの：ビニールテープ(○×を仕切るテープ)、画用紙もしくは模造紙、音楽(可能であれば)、タイマー(クイズの間の時間を図る)

小学校での企画実施の前に、大学の授業でグループⅠ企画説明と実際に45分の活動を実施し、学生全員で活動内容の意図を共有し、改善点などを検討し合う時間を設けた。グループⅠの企画は、「子どもたちにとって身近な事柄」から中国の文化を楽しく知ってもらいたいという意図から、中国の小学生「李華さん」の一日を取り上げ、クイズや体操で体を使い、絵や写真を使い視覚的にも児童に伝えようとする工夫がなされていた。しかし、実施後のレポートでは反省点として、企画の段階では想定できなかった子どもの反応に戸惑い、準備不足を感じるといったコメントが多く見られた。

では、クラブ企画実施Ⅰレポートを【活動テーマと内容】【子どもへの指導】【支援のあり方】【クラブ企画実施Ⅱへの反映】という4つの観点から分析と考察を行う。

3-3-1. 【活動テーマと内容】

- ・小学校へ通う一日を見ていくという展開は、児童にとって身近なことであるし、想像しやすかったのではないかと思う。(H)
- ・遊び感覚で中国語を入れていくと頭の中に残りやすいと思った。また、すぐに日常で使えるような言葉だったので、友だち同士で使えて楽しめるなどおもった。(B)
- ・子どもたちは聞くだけではなく、しっかりと中国という国に興味をもって質問したり、驚いたりして参加していた。質問があるということは、もっと知りたいという気持ちがあるということだと思う。(B)
- ・ただ、見て、聞いていただけではなく、実際に体を動かす時間があったことなどのおかげで、子どもが最後まで飽きずに楽しみながら参加できたのだと思う。(I)
- ・今回のように参加型の活動を行う方がよいと感じることができた。(E)

扱ったテーマは、クラブ参加児童と同じ小学生という共通点が基盤にあり、その上で、日本と中国の小学生の共通点や相違点に気付かせる活動であった。中国の小学生の一日の流れに沿って活動が進められており、児童も「給食の時間だ。中国はどうなのかなあ。」などと自分たちの一日と比べながら、楽しんで参加ができていた。「身近なこと」を「遊び感覚」や「体を動かす」ことで、「もっと知りたい」と児童が思える活動になったと捉えている。活動で知ったことを「友だち同士」で使えるというコメントもあり、クラブの時間で知ったことがクラスの友だちへと広がる可能性のある活動としても受け取っているであろう。

3-3-2. 【子どもへの指導】

- ・驚いたことがある。子どもたちは私が予想していたうごきと全く違い、予想外な動き、発言をしてきたことである。／それはやはり、自分たち目線で考えてしまっていたからかなと感じた。(K)
- ・きちんと聞いてくれる児童もいれば、ちょっとのことで友だち同士で話し出す児童もいる。発表者の人がどう進行していくかが重要だと思った。(H)
- ・「算数」を「数学」と言い間違えたり、「こんばんは」と「おやすみなさい」の中国語の間違いを全体で復唱した後に訂正したりするのも児童を混乱させてしまったと思う。児童の集中力を途切れさせてしまうきっかけになると思うので、発表する際には気を付けたいと思った。(H)
- ・小学生に対する説明、進行の仕方に十分な配慮が必要であるということである。(「算数」を「数学」と言い間違えたことに対する児童の反応を受けて)小学生にとってはさまざまな情報に興味を示し、何か気になったらそちらに注目してしまいがちになると知った。(G)

実際に児童を対象に自分たちの企画を実施することで、子どもたちへの指導の難しさに多くの気づきがあった。企画の段階では考えられていなかった子どもたちの想定外の動きや、おしゃべりな子どもへの対応がその場で十分にはできなかったようである。また、些細な言い間違いや流れの中断によって、子どもたちの集中力が途切れてしまうことも体験を通して学んでいる様子が見えてくる。

3-3-3. 【支援のあり方】

- ・私たち以外の班の人にどう動いてもらうか、考えていなかった。(F)
- ・進行に一生懸命になってしまい、なかなか生徒たちにうまく対応することができず、小学生の先生方にまかせっきりになってしまった所が多くあったように思う。(E)
- ・小学生と私たち大学生が交流し一緒に学習する様子が一切なかった。(C)
- ・企画に参加する側としてクイズを盛り上げよう、子どもたちとなるべく交流しよう、と小学校に行く前までは考えていたけれど、いざクラブが始まるとそこまで盛り上げることも子どもたちと交流することもできなかった。(D)
- ・①グループの発表を楽しんでいただけで小学生の子どもたちに声をかけたり、気遣ったりしていなかった。(A)
- ・小学生に対して大学生から近づいていくことで、緊張や不安を取り除き、うまくコミュニケーションを取れるような状態にすることも考えることができたはずだ。(G)

企画実施担当の学生グループには、自分たちの企画内容や進行についてのみ考えており、支援参加の学生の役割を考えていなかったといったコメントが見られた。また、支援参加の学生グループからは、子どもたちと関わってほしいと思ったが、声掛けなどどのように接していけばよいのかわからなかったというコメントが多かった。12/1のクラブ参加の際には、大学生2名と児童1名のグループで活動を行い、交流しやすい環境が整えられていたため、子どもたちに声を掛け、自然と接していくことができたのであろう。小学生の子どもたちに慣れていない学生もおり、また、大学1年生の段階では、子どもを対象とした初めての活動実施であるため、その場で対応を考え、自分から子どもたちに近づいていくことには容易なことではなかったであろう。しかし、自分たちがすべきだった支援のあり方については気づけており、今後の活動にも生かしていけるであろう。

3-3-4. 【クラブ企画実施Ⅱへの反映】

- ・もう一度企画を見直して不備がないか、どうしたら改善できるかななどをグループで話し合っ、子どもたちが心から楽しめるような企画にしていきたいと強く思った。(D)
- ・発表をする人たち側の細かい計画を立てるだけではなく、しない側の人々の行動についても考え、視野の広い企画をつくっていく事が大切なのだと思えてわかった。(H)
- ・次回のクラブ活動をよりよいものにするためにも、小学生に対して明示的で理解しやすく注目してもらえる説明内容・言葉遣い・資料の作成を心がけ、また大学生と小学生の距離感を縮められるように、大学から積極的に歩み寄ろうとする姿勢を示すことを改

善点として、より小学生に楽しんで世界のことについて学んでもらえるようにしたい。(H)

- ・次回の私たちが発表するときも、私たちが予想していない反応が返ってくるかもしれない。だから、様々な状況を考えておいて、対応できるようにしておきたいと思った。(K)

上記は、クラブ企画実施Ⅱを担当する学生グループⅡのコメントである。クラブ企画実施Ⅰの反省点を踏まえ、クラブ企画実施Ⅱをよりよいものにするため改善したいという思いが見られる。子どもたちの様々な反応を想定しながら、子どもたちにとって分かりやすい説明、言葉遣い、資料作りに意識が向けられており、クラブ企画実施Ⅰでの経験を生かそうとしている様子が窺える。

実際に活動を企画実施し、また、子どもたちを支援することにより、多文化共生につながる活動のあり方、また、その具体的な指導の工夫に目が向けられていることがわかった。

3-4. クラブ企画実施Ⅱレポートの分析と考察

学生グループⅡの11名(内訳は、日本人学生6名、中国人留学生2名、ベトナム人留学生2名、タイ人留学生1名である)がクラブ活動の企画と実施を担当した。3-3. で取り上げたクラブ企画実施Ⅰの内容を受け、良い点は生かしながら、実施までに改善を行っていた。「いろいろな国について知ろう! ワールドバスケット」というテーマでの活動企画であった。グループⅡの活動企画書は以下である。

《グループⅡ活動企画書》

1. タイトル: 『いろいろな国について知ろう! ワールドバスケット』
2. ねらい: 日本の学校でよく行われる遊びを海外の情報を交えて行うことで、小学校が日本を含む様々な国のことについて興味関心を持てる。
3. 企画内容:
 - (1) ゲームの内容
日本の学校でよく遊ばれている「フルーツバスケット」のルールを元に、日本、中国、タイ、トナムについての簡単な情報を知ることができるように遊び方を工夫したゲーム。
 - (2) 遊び方
まず最初に、日本、中国、タイ、ベトナムについて、各国の有名な食べ物と動物、各国の「こんにちは」の言葉をカードに書き、ゲーム前に説明して覚える。説明の際に使用したカードの黒板に貼る。
次に、椅子を一つの円の形に並べ、それぞれ着席する。このとき椅子の数は参加人数より1少なくする。着席後、全員に4カ国の国名の書かれた名札を選んでもらい、自分の担当の国を決める。着席していない一人は円の中央に立っておく(以下: 指示者)。
ゲームが始まると、指示者は授業の最初に做った食べ物、動物、挨拶のどれか一つを大きな声で言う。指示されたものの国の名札を付けた生徒は立ち、自分が着席していた椅子以外の椅子に素早く座る。(例: 指示者が「ニーハオ」と言うと、中国の名札を付けた生徒が移動する。)このとき指示者も一緒に移動する。座れなかった生徒は次の指示者となり、同様に指示者を出す。これを繰り返す。
 - (3) 準備物
・各国の有名な食べ物、動物、挨拶の説明用のカード(写真付き)
・国名の書かれた名札
 - (4) 当日の流れ
10分 4カ国の紹介と各国の食べ物、動物、挨拶カードの説明
5分 ルール説明
20分 ゲーム
5分 片付け、感想

クラブ企画実施Ⅰと同様に、小学校での企画実施前に大学授業にてグループⅡ企画説明と実際に45分の活動を実施し、改善点について全員で検討する時間を設けた。グループⅠの企画実施を通して学んだ、子ども

たちが飽きずに集中して活動に参加できる工夫を取り入れ、「子どもたちにとって身近なもの」を「体を使い」ながら、楽しく知ることを目指した企画である。外国のことにのみ目を向けるのではなく、日本のことも取り入れた内容であるのが特徴的であろう。

では、クラブ企画実施Ⅱのレポートを【活動テーマと内容】【子どもの指導】【支援のあり方】の3つの観点から、分析と考察を行う。

3-4-1. 【活動テーマと内容】

- ・ゲームで体を動かして飽きないよう企画を考えることができた。(B)
- ・(クラブ企画実施Ⅰの反省から、)学んだ各言語のあいさつを使い交流の時間を設けること、単調になってしまうと考えられたワールドバスケットの時間はゲーム中での難易度の変更、国の交換などで対処した。(F)
- ・挨拶、たべもの、動物の画像を用いて黒板に貼り、視覚的にわかりやすくされていた。徐々にゲームの難易度をレベルアップしていくという進行も非常によく考えられているなど思った。(C)
- ・活動では外国の挨拶や生活習慣を取り上げただけで表面的なものを紹介することに終始していたのではないだろうか。話し合いの段階で子どもたちに楽しんでもらうことを主軸に話し合ってしまう、活動内容の工夫についての話がメインとなっていた。子どもたちに何を学びとってほしいかという軸を決めて、そこから活動の様式を考えていくべきだったのではないかと反省している。(I)

子どもたちが活動に飽きずに集中できるよう、また、視覚教材等も使用し、わかりやすさの工夫へのコメントが見られた。一方で、楽しむことに焦点が置かれてしまい、挨拶や習慣といった「表面的」なものの紹介に留まってしまったという反省も述べられていた。「表面的」として捉えられる可能性も考えられるが、子どもたちにとって、この活動が「表面的」なままで留まるかどうかは、短絡的には判断ができないものであろう。

3-4-2. 【子どもの指導】

- ・一方的な説明ではなく、子どもたちの反応を見ながら進めていくことができた。(B)
- ・所々で小学生が盛り上がり過ぎてしまって上手く進行が進んでいない部分があった。／聞くときは聞く、動くときは動くというようなメリハリをつけることを大事にしていくべきである。(E)
- ・みんな楽しんでくれたが、熱くなりすぎて転んでしまった子がいて少し危険だったかなと感じた。そのような場合にどのように対応すべきか考えなければいけないと思った。(B)
- ・教師側がしっかりと活動や授業の目的を理解し、学年の発達段階を考慮した上で、綿密な計画を立てておくことが不可欠であると実感することができた。(G)
- ・小学生の現状をあまり知らない私たちにとって、小学生が難しいと感じない程度の活動、安全に楽しくできる活動というのを考えることは難しかった。(H)
- ・(クラブ参加を通して)小学校の現場のことや小学生とはどのような子どもたちであるかということについて少し理解した。(A)

子どもたちの発達段階に合わせた活動を考えることの重要性は感じているが、実際に小学生の実態を知らないままで活動を考えることの難しさに触れている。子どもたちの反応を見ながら、「メリハリ」のある指導を行う必要性についても感じ取れたようである。

3-4-3. 【支援のあり方】

- ・小学生の横に私たち大学生がついて小学生が大学生と触れ合えるようになっていた。(C)
- ・前回の企画では子どもたちと交流することができなかったので、今回はその反省点を活かして積極的に子どもたちに話しかけた。／子どもたちからの反応を待つのではなく、自分から子どもたちに関わっていくようにすることが大切だと気づいた。(D)

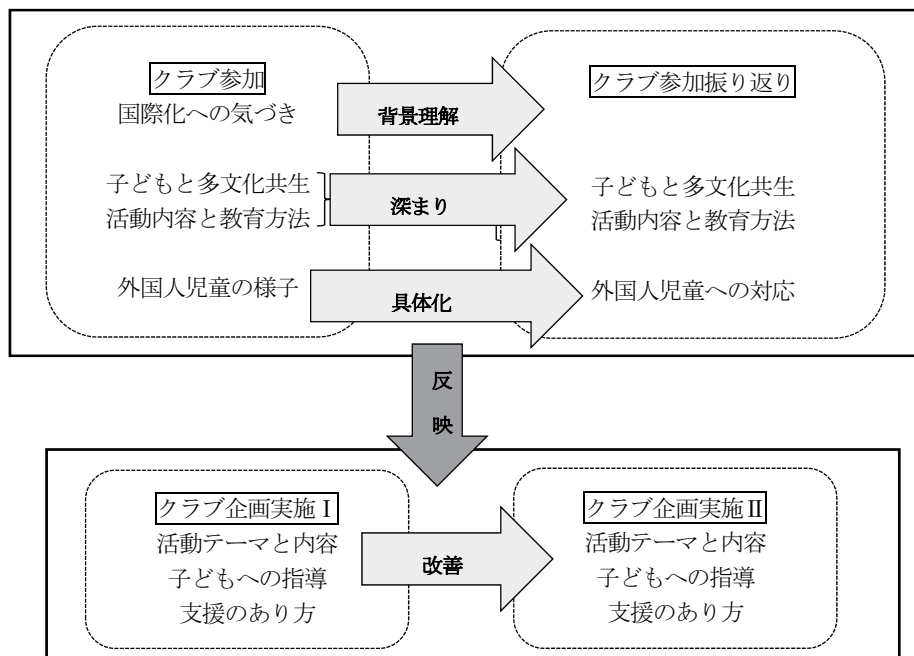
クラブ企画実施Ⅰの反省を受けて、最初から学生と児童のペアを作り、活動を行うことで、スムーズに子ど

もたちへ接していくことができたようである。また、学生自身も、積極的に自分たちから話し掛けようという気持ちで子どもたちとの交流に臨んでいたことがうかがえる。

クラブ企画実施Ⅱのレポートでは、クラブ企画実施Ⅰでの反省点を活かし、クラブ企画実施Ⅱを見直すことで、教える内容や指導の方法の改善が見られた。実施学生も参加学生も子どもたちとの接し方にも前回の様子とは異なり、各自が「交流したい」という強い気持ちを持って子どもへの声掛けを行うなどの試みがなされていた。また、活動の内容自体について「表面的」ではないかと言及している学生もおり、何を教えることが多文化共生につながるのかを改めて考えることにもつながっているであろう。

3-5. クラブ参加とクラブ企画実施のレポートにおける学生の意識

3-2. 3-3. 3-4. で、学生のレポート内容の分析と考察を行ったが、そこから見える学生の意識の流れを図1で確認しておく。



【図1】 クラブ参加・クラブ参加振り返り・クラブ企画実施ⅠⅡの4つのレポートにおける学生の意識の流れ

クラブ参加と振り返りでの気づきをクラブ企画実施Ⅰに反映することで、企画内容の意図が明確に決定され、実施方法の工夫につながった。クラブ企画実施Ⅰの後では多くの問題点が挙げられたが、クラブ企画実施Ⅱの際、更に改善を加えることができた。

次章では、このようなクラブでの体験を通し、最終レポートにおいて「学校における多文化共生」について、学生がどのような意識を持つに至ったかを見ていく。

4. 学生コメントと考察（2）－最終レポート（学校における多文化共生について）－

最終レポートではクラブ活動を通して考えた「学校における多文化共生」について、各自で考えることをテーマとした。クラブへの参加や企画実施、また、振り返りでのディスカッションや企画実施のためのグル

一歩準備等を踏まえた、学生の「学校における多文化共生」の意識についてみていきたい。

学生のコメントは大きく 3 つの観点にまとめられた。①視野を広げ、様々な文化の柔軟な捉え方につながる実践、②文化や価値観の違いを尊重し、知り、受け入れる姿勢への導き、③子ども同士の関わり、の 3 点である。

①視野を広げ、様々な文化の柔軟な捉え方につながる実践

- ・(言葉や文化が違うことで外国の子が受けるような) 差別をなくし、国関係なく一緒に付き合っていけるような関わりを持ってもらうためにも、学校現場において多文化共生について学ぶことが大切だと考える。小学生のうちからいろんな国について触れておくことは、視野を広げることができる^(B)。外国の子が同じクラスにいても、自分たちと違うと差別するのではなく、あの子の国ではこんな文化なんだな、などと捉え方が変わると考える。(B)
- ・幼いころから世界の文化に触れることは自分の視野を広げることができる^(D)と思うので、良いことだと考える。学校で世界の文化について学べるような機会を設けることが必要である。(D)
- ・外国語や外国に対する知識はもちろん必要であると同時に、まずは日本国内のことに興味を持つべきなのではないかと私は思う。(C)

多くのことを柔軟に吸収することのできる小学生の段階から、様々な国や文化について知ることは「視野を広げる」ことになり、自分たちと異なる文化に出会ったとしても、その際の「捉え方が変わる」ことにつながる実践が、小学校に求められる多文化共生のための活動と考えている。活動が一時的なものではなく、子どもたちの視野を広げるきっかけとなり、長期的な活動として考えていることがうかがえる⁹⁾。また、日本の子どもたちにとっては日本を知ることの重要性への気づきもある。多文化共生には、次の②で触れるように「互い」に「尊重」することが含まれるが、そのためには日本の子どもたち自身も日本のことを知り、自分の文化に誇りを持ち、伝えられることが必要である。

②文化や価値観の違いを尊重し、知り、受け入れる姿勢への導き

- ・外国の人が日本に合わせてくれるだろうと考えるのではなく、私たちから歩みよることが大切と考える。(B)
- ・日本人の子どもたちと外国人児童の間の違いを認識するだけにとどまらず、その違いは人間的な違いではなく、文化の違いであって、それを受け入れて尊重しなければならない^(G)ということを教えるべきである。(G)
- ・世の中には自分と異なる文化・価値観を持って生まれている人がいるということを一人一人が認識し、そのような人を受け入れ、理解しようという姿勢が重要な^(H)。(H)
- ・多文化共生において、最も大切なことは互いの文化を尊重して、それについて知り、受け入れるということだ。多文化共生は一歩間違えれば相手の文化をないがしろにして自国の文化と同化する事態に転じてしまう恐れもある。そうなることを避けるためにも、小学校の頃から異文化について知ることはとても大切だが、他の文化を尊重することをいかにして伝えるかが今後考えるべき課題として考えられる。(I)
- ・この二つの視点(共通点と異なる点)で国と国を比べるという時点でその国の人へのイメージが固まってしまう。外国人一人ひとりとコミュニケーションをとる姿勢が多文化共生という考えには必要なのではないかと考える。(F)
- ・互いの文化を尊重するということは、けっして相手の文化に自分も染まる、などといったことではなく、「相手の文化を否定しないこと」であると考えている。自分が暮らしている土地の文化とかなり異なった考えを持つ文化を、「変だ」「おかしい」と感じてしまうのは仕方ないことであると思う。しかし、それをその文化を持つ本人の前で否定したりすることはけっして許されないことである。違いを違いとして受け入れる、最終的にこう考えてくれたらいいなと考えている。(J)

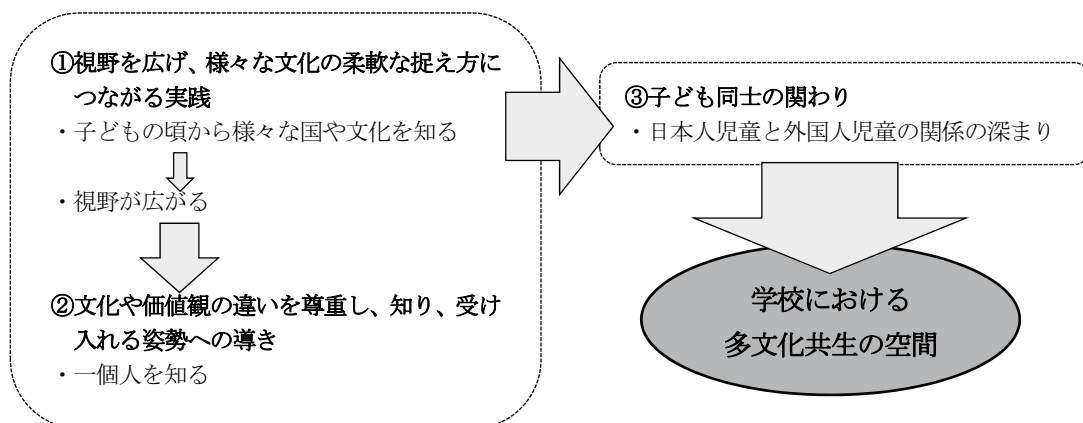
ここで述べられているのは、多文化共生の考え方そのものであろう。「異なる文化・価値観」を「互い」に「尊重」し、「それについて知り」「違いを違いとして受け入れる」ことを通して、多文化共生といえる環境となる。「一人ひとりコミュニケーションをとる姿勢」という表現からは、国という大きな単位で捉えるのではなく、一個人として相手のことを知ることに重要性に気づけていると言えるだろう¹⁰⁾。

③子ども同士の関わり

- ・日本人生徒と外国人生徒の関わりもとても大事なのだ。日本人生徒に対し、世界に関する様々な知識を与え関心を持たせることはこれからの多文化共生に必要なのではないか。そのために、教師が生徒に対して、世界についての知識を教え、興味を持たせていかなくてはならない。これらのことで、日本人生徒と外国人生徒の関係性がより深まり、より良い多文化共生が行われるのではないだろうか。(E)
- ・小学校には、様々な国出身の子がいるであろう。そのような子と他の子と変わらずにたくさん接することで、お互いに困っていることを助け合ったりすることができる。子ども同士が普通に接していく中で多文化共生に大切なことを身に付けていけるのではないかと考える。そのためには、特定の子とばかり接するのではなく、たくさんの子と接する機会が必要である。その機会を作っていくのは、教師や大人の役割であると考え。(K)

学校における子ども同士の関わりの重要性も述べられていた。日本人児童と外国人児童が共に学ぶ場がお互いの文化を認め受け入れる空間であれば、「お互いに困っていることを助けあったりする」ことができる。このような空間作りが、学校における多文化共生の目指すべきことであり、その空間作りへの取り組みを行うのは教師の役割であることも意識できている。

以上、最終レポートを基に、学生が捉えた「学校における多文化共生」について述べた。図で表すと以下のようなになるであろう。



【図2】 学校における多文化共生に対する学生の意識

5. まとめと今後の課題

多文化共生をテーマにしている小学校の「世界を結ぼうクラブ」活動参加への取り組みを通して、多文化共生やそのための活動に関する学生の意識がどのように変化し、最終的に学校における多文化共生を如何に捉えたのかを見てきた。

まず、クラブの参加や企画実施では、多文化共生についての知識がほとんどなく、小学校訪問も自身の小学校卒業以来であったり、小学生と接することがない学生も多く、心配と不安からのスタートであった。しかし、実際に子どもたちと触れ合いながら、活動に参加したり、活動を企画し実施する中で、子どもと多文化共生について、学生なりに考えを深めていくことができていた。

そして、一連のクラブ活動への取り組みを通して、最終的には学校における多文化共生へ学生の意識を向けることができた。学校における多文化共生には、まず、「視野を広げ、様々な文化の柔軟な捉え方」が必要であり、そのような捉え方ができることにより、「文化や価値観の違いを尊重し、知り、受け入れる姿勢への

導き」が行われ、それが「子ども同士」の関係を深めることになり、結果として「学校における多文化共生の空間」へとつながると意識化されたと言えるであろう。「子ども同士」の関係は、1. で取り上げた、矢崎（2008）の外国人児童と「日本人児童の良好な交遊関係」の視点と同じであり、多文化共生の根幹となるべき視点への気づきである。

本取り組みでは、学生の意識を「学校における多文化共生」に向けることはできたが、学生へのコメントにも「多文化共生について継続して考えていく必要がある」とあったように、今回の取り組みが一時的な意識付けにならないよう、今後も多文化共生に学生が目をむける機会を設けていきたい。そうすることで、多文化共生につながる活動も充実した内容の展開に結びつくであろう。

将来的に学校の多文化化は更に進み、教員には、日本語や日本文化をはじめ、様々な言語や文化を持つ子どもたちが共に学ぶ空間作りの能力が強く求められるであろう。今後も教員養成の中で、多文化共生を視野に入れた取り組みを行い、学校における多文化共生の実現を目指していきたい。

【注】

- 1) 「多文化共生」という表現の使用は、1985年に『多文化教育の比較研究』が出版され、その後、外国籍住民が集住する自治体等で徐々に広がってきたとされている。（野山 2008）
- 2) その他に、平成 26 年「学校教育法施行規則の一部を改正する省令等の施行について（通知）」では、外国人児童生徒に対する日本語指導の需要が高まっていることを踏まえ、児童生徒に対する日本語指導を充実させるために学校教育法施行規則の一部が改正された。この改正により、学校現場において、日本語指導が必要な児童生徒には、特別の教育課程に係る授業として日本語指導を行うことが可能となった。この通知は、外国人児童生徒への法的根拠のある指導について述べられたものであり、平成 26 年は「画期的な改革の年」（若林 2014）とも言われている。
- 3) もちろん外国人児童生徒への先駆的な教育に取り組んでいる実践もある。例えば、『ニューカマーの子どものいる教室－教師の認知と思考』では、ニューカマー（新来外国人）の子どもたちをめぐる教育実践に取り組む教師たちの経験や問題意識が詳細に取り上げられている。
- 4) 矢崎光夫 2008 「外国人児童と日本人児童とのインターアクションのための日本語支援」『日本語教育』120 号 pp.103-112
- 5) 文部科学省 HP 「「日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に関する調査（平成 26 年度）」の結果について」より、
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/27/04/1357044.htm（2015/10/20 アクセス）
- 6) 「日本語指導が必要な児童生徒」数は、各学校の申請によるものであるため、実際には日本語指導が必要であると気づかれていない児童生徒が多く在籍していると考えられる。
- 7) ドナルド・A・ショーン 2007 『省察的实践とは何か－プロフェッショナルの行為と思考』柳沢昌一・三輪健二（監訳）鳳書房（Donald A. Schorn 1984 *The Reflective Practitioner: How Professionals Think In Action*. Basic Books）を参照。
- 8) 1 年目のクラブ活動の取り組みについては、林（2010）「学生の多文化意識の育成に向けて－小学校クラブ活動への参加から－」『三重大学教育学部研究紀要』第 61 巻 pp127-137 を参照されたい。
- 9) 森茂（2011）で述べられている「多文化教育は一学習単元、位置活動で完結するものではない。発達段階に合わせて継続的に、繰り返し多文化共生にむけた姿勢を培っていく必要がある」という考えにつながる意識であろう。
- 10) このような学生の意識は、森茂（2011）が述べている「多文化共生にむけての教育の取り組みは、マイノリティの児童生徒のための教育支援と同時に、マジョリティである日本人児童生徒を含むすべての児童生徒に多文化共生にむけての資質をいかに育成するかという視点で考えることが重要である。なぜなら、マジョリティの意識（価値）変革なしに多文化共生はあり得ないからである。」と共通するものであろう。

【引用参考文献】

金井香里 (2012) 『ニューカマーの子どものいる教室—教師の認知と思考—』、勁草書房

野山広 (2008) 「多文化共生と地域日本語教育支援—持続可能な協働実践の展開を目指して—」『日本語教育』138号 pp.4-13

森茂岳雄 (2011) 「多文化共生をめざすカリキュラムの開発と実践」『「多文化共生」は可能か—教育における実践』馬淵仁編、勁草書房

若林秀樹 (2014) 「小中学校現場が抱える外国人児童生徒教育の課題—日本語指導に関する「特別の教育課程」の実施を機に考える—」『国際人流』第324号

謝辞：本取り組みは、I 小学校の先生方と児童の皆さんの多大なご協力によって成立したものです。先生方には、学生へご指導・ご教示いただくことも多く、大変貴重な経験となりました。心より感謝申し上げます。